

機関誌と板東名誉顧問

国際経済労働研究所 理事 藺田 早織

私は2011年に編集担当として当研究所に入所し、機関誌『Int' lecowk - 国際経済労働研究』の編集と、その内容を定める編集委員会の事務局を担当してきました。板東氏は当時は会長であり、この編集委員会の中心的な立場を担っておられましたので、一緒に仕事をさせていただく機会が多くありました。板東氏は機関誌や編集委員会といった編集の関連の仕事に対して、強い思い入れを持って関わっておられました。

機関誌に関連して、特筆したいのが巻頭の連載「地球儀」です。この連載では、毎号、経済を中心に社会的な動きに独自の視点で切り込んで情報発信をされてきました。「地球儀」の前の連載（「つむじ風」、1972年開始）とあわせると、板東氏の連載が終了する2022年までⁱ、50年続けられたことになります。これほど長年にわたって機関誌での議論をリードされてきたこと、尊敬の念にたえません。

このほか、機関誌の特集にも何度もご寄稿いただきました。海外情勢にも詳しく、中国やロシアなどの動きもたびたびご紹介いただいたほか、毎年1月号に掲載する「座談会」も精力的に準備をして楽しみにされていました。原稿の校正のやりとりはもっぱらFAXと電話で、大変な面もありましたが思い出深いです。

また、色々な方とお会いになる場に編集担当として同席させていただくことができました。印象深いものの一つに、宝樹文彦氏ⁱⁱと板東氏との対談（2012年）があります。労働戦線統一をはじめ、ともに組合運動や労働問題に取り組んでこられたお二人の対談は、和やかでありながらも、おそらくいろいろな修羅場を経験されてきた方同士の信念のようなものが感じられ、身の引き締まる思いがしたことが思い出されます。対談は複数回を予定していましたが、宝樹氏の体調悪化により1回限りとなり、貴重な機会となりましたⁱⁱⁱ。

少し横道にそれますが、編集委員会などでお会いする板東氏は、いつもお洒落で、ハットやループタイなど小物も素敵でした。ファッションだけでなく、食や旅行などさまざまな文化にも造詣が深く、そのお話をよく聞かせていただいたことも懐かしく思い出されます。

私が板東氏と最後にお会いしたのは、研究所の75周年記念企画（2023年）で会場にお越しいただいたときでした。板東氏が基礎を築かれた調査運動の現在の広がりを共有することができてよかったなと思います。

板東氏が大切にされてきた機関誌、これからも運動に資するものとして引き継いでいきたいと思っています。

ⁱ 2023年以降は本山所長が「地球儀」を執筆されている。

ⁱⁱ 元全通信労働組合 中央執行委員長。1967年に「労働戦線統一と社会党政権樹立のために」を発表。

ⁱⁱⁱ このときの対談は「戦後労働組合運動こぼれ話—宝樹 文彦氏とともに—」として、本誌2016年9月号に収録。なお、宝樹氏は2014年9月に逝去されている。